
煌夜のキセキ

青空 白雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

煌夜のキセキ

【著者名】

青空 白雲

250992

【あらすじ】

理論をぶち壊す魔法を扱える者 魔法使い 赤月煌夜は『魔

術科高等学校』のダメ学生として生活していた。

そんないつも通りの帰り道。

煌夜の頭に美少女が銃弾のように降ってきた！？

少女の名前はフィナと言つらし！

どうやら、フィナには秘密があるらしい……？

プロローグ

世界が死んだ。

夏だというのに極寒のように寒く感じてしまうような光景だつた。噴水が噴き出し、電気屋のショーウィンドウに並べられているテレビの音が駅前に空しく響く。

町に住む人々が、動物が、死んだように倒れ、街路樹は、一切の活動を停止している。そしてその全てに一対の羽根が接続された。

車やビルに傷一つつけることなく通過し、人に接続されているところを見ると、その羽根には壁というものが無意味らしい。

一人の少年と一人の少女のみしか存在していない世界。

腰まで伸びている不思議な銀髪を持つ少女は少年の予想通り、やはり無表情だつた。

大きくつぶらな瞳はガラス玉のようであり、しかし輝きを失つている。

少女の背中から大小様々な天使のように幻想的な蒼の羽根が噴水のように無数に、無造作に噴き出している。

その羽根の共通項は倒れている世界の全ての動植物に接続されているということ。

無論。

少年にもだ。

少年の場合、左腕に接続されている。

いや、接続というより、左腕と一体になつてているといった感覚に近い。

『アクセス完了。魔術起動区間部に接続……。接続完了。情報なし』

時間にして、約五ミリ秒。羽根から情報を読み取る声が脳に直接

聞こえた。

自分が心の中で喋つてゐるよつた妙な聞こえ方だ。

『……魔力検索。種別不明。……解析開始』

少年は全身を剣山で突き刺されたよつた激痛に顔を歪めながら何をするでもなく少女の顔を見続ける。

少女の顔は無表情だ。

ロボットのような無機質さを秘めている訳でもなく、ただ、無表情。

警えるとするなら『人間』としての部分を完全に欠落させた『人間』

少年の心臓が痛む。今の激痛なんて目じやないくらいに。

魔法使い。

そう言われる人が居る。

突発的に現れる巨大な力を持つ人がそれ。だけど。けれど。それでも。

少年の魔法では少女は救えない。

涙が、零れ落ちそうになつた。

心が、『諦め』という名の暗雲に覆われそうになる。

『……解析不能。……その間二兆六十七億一千三百万六十七の情報

解析を停止。全演算能力を処理系統に移行』

少年に接続されている一対の羽根以外、色素が薄くなる。

そして、少年に接続されていた蒼の羽根の色が濃厚になり、輝きを増した。

一章第一話

奇跡の扉を開ける言葉は一誰の脳にも（・・・・・）刻み込まれている。

人為的にそれを気づかせることで誰もが魔術を使えるようになるのだ。

ただ、眞の意味に気づく者は少ない。

魔法使い ダイアン・フォーチュン

赤月煌夜は畳に正座している足をもぞもぞと動かしながら薄田を開けて、暗闇に染まつている空間を見つめる。

目の前の自分の手が見えるが、それだけだつた。

右横に居る筈の山辺恋も、左隣に居る筈の相田空からも規則的で機械的な呼吸音しか聞こえない。

精神が魔術起動区間へ在中しているのだ。

精神を外界から完全に切り離し、脳のどこかに存在すると言われている魔術起動区間に在中させる方法である。

どこにあるかも分からぬのに精神をそこへ飛ばせることから動物の帰巣本能に似ているかもしれない。

因みに、煌夜にそんなことを出来る力はない。

暗闇と規則的な息使いが、煌夜を眠りの世界へ誘つ。

寝ちゃダメだと思いながら、小さくあぐび。

「赤月君？ あなたは、あくびを噛み殺して何をしてるんですか？」

怒り心頭と言つた様子の先生の声が聞こえた。

藤原美奈先生。二五歳。性格は優しく生徒に親身になつてくれる人だ。

魔術学（実習）の時間にやる氣のない煌夜に腹を立てているらしい。

煌夜があくびをしたといふことが分かつたところを見ると暗視の魔術でも使つてゐるのだろうか。

煌夜はがしがしと頭を搔いて、

「だつて、出来ないんですよ俺。在中なんて……知覚ぐらいなら出来るんですけど……一応

「……けど、出来てない人達皆頑張ってるんですよ。赤月君も頑張らないと」

ちょっとびり疲れたよつに言つ煌夜に美奈先生は諭すよつに言つた。

ふあーと大きくあくびをする音が聞こえた。

煌夜の間近に居た先生が慌てたように駆けだした音がした。

「黒神ちゃん——！」

あわあ！？ と叫び声が和室に響いた。

「あー」

黒神創が変な声を出して、魔術実習棟の廊下で止まつた。

冒涜的な名前だが、本名であり、その所為か少しついてない。

煌夜は創の視線を目で追うと、そこには縦一メートル、横三メー

トルの長方形の強化ガラスがあった。不良の溜まり場になるのを防ぐという名目でつけられたモノである。

そこに近づいて覗くと、中は暗闇だった。

赤く輝くのが暗闇を踊り、次の瞬間には電撃に撃ち落とされる。のが破壊される音は聞こえない。防音対策を施されているのだ。次は二つ同時に出てきた的を剣特有の鈍色の螺旋が一つの的を精确に切り裂く。

一瞬遠赤外線と自動修復式魔術を使った『的』のお陰で見えた。細身の男子だった。

「やばいなアレ」「

「野に咲く梅のこと?」

煌夜は興味なさげに田だけでそれを見て言つ。

「一野梅（．．．）」

「ふつ。ボケの才能はねえな」

創が怪訝な顔をしたので、付け足す。

「はつ！ お前には高度過ぎたボケだったか？」

煌夜は言じ返す。

何も考えずに言つた割には自信はあったのだ。

「ま、それはどうでもいいとしてさ」

創はホントにどうでもいいといった風に答える。

「くつ！ 僕のたまのボケをお前……まあ、いいか。んで何なんだ

「ア

「俺らの脳には、MSSがある訳だろ？」

MSS (magnetic start section) 魔術起

動区間ということである。

どこに有るのかも分からぬそれは、学者によつて主張は違う。

前頭葉のどこかにあるのだと、主張する者、脳の全てが実はそうなのだと言う者、魔力がそうなのだとぶつ飛んだ主張をする者、更には周囲に漂うマナに無意識に接続し、それをネットワークのよつにして他人の脳を使つているのだと言う者まで居る。

ただ分かっているのは莫大な演算能力を有しており、魔術という力を発動させられるということだ。

「ん

適当に煌夜は答える。

その間にも男子は、流れるような動作で机を壊していく。
「どう違うんだろうな。俺とアイツじゃよ」
絶対にあの男子のようにはなれないと断言しているように言いながら、しかし悲しそうではなかつた。

煌夜は自分の力を考える。

世界では、希少で価値のある力 魔法。

「全部じゃね？」

「テメエ、ぶつ殺すぞ？」

創は笑顔でそう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5099n/>

煌夜のキセキ

2010年10月8日11時09分発行